

環境倫理学

自然と共生理論

日時：平成19年11月10日（土） 10:00～15:00

講師：竹内 恒夫（名古屋大学大学院環境学研究科教授）

概況



【午前】

環境の認識が拡大している話から講義は始まりました。かつては環境(問題)といえ
ば公害でしたが、近年は、脱温暖化社会(温暖化が進まないような仕組みを持つ社
会)、循環型社会(資源を保全し排出を削減する仕組みを持つ社会)及び生物多様性
といった考えまで拡大しています。減らすべき二酸化炭素の排出量や廃棄物として、
排出量は90年レベルの半分以下、廃棄物は2010年時点で90年レベルの1/4以
下、循環利用率を90年レベルの2倍にという数値が示されました。

次に、環境を取り込むことで経済や社会が変わりつつあることが紹介されました。例
えば、環境を取り込むことで企業価値の向上につながるという意識がその表れです。
また、環境と経済社会活動を巡る3つの考え方(エコ右派、エコ中道、エコ左派)など
が紹介されました。古代中国の諸子百家(儒家、墨家、道家)になぞらえるくだりは意
外でした。

続いて、持続可能な開発の概念やその背景が紹介され、森林の利用やバイオ燃料
への代替などの現象を例に、ハーマン・デイリーの3原則が紹介されました。また、化
石燃料の大量使用は、木材や鯨油など再生可能な資源の代替が契機となったという
歴史も紹介されました。

最後に、アメリカのトルーマン大統領の演説が契機となり世界的に開発が唯一の目
標になったという背景と、近代ヨーロッパによる植民地化という地球的な生物多様性
喪失の歴史的背景が紹介され、アメリカの環境主義やヨーロッパの環境に対する取
組みが紹介されました。

【午後】

地球憲章の紹介から講義が始まりました。90年代以降に現れた環境効率革命について説明があり、そのコンセプトや手法、効率の盲点(反動効果、量的効果、成長効果)が紹介されました。そして、効率だけでなく充足も含めるべきという考えも紹介されました(ハーマン・デイリー、ボルフガン・ザック、ヨゼフ・フーバーなど)。

次に、モノを個人所有するのではなく利用するサービサイジングの考えが紹介されました。メーカーなどが所有するモノが提供するサービスだけを享受するもので、リユースやリサイクルがしやすく、取得価格の高い環境機器の普及も可能というものでした。

最後に、名古屋市における二酸化炭素排出量60%削減のロードマップが紹介されました。なお、このロードマップは、2050年における人口や活動量が現在と同一という前提に試算したものです。